

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員(主査) 田島信元 印

【審査結果】

本論文は、在日留学生の異文化適応過程について、社会文化的アプローチの視点から、社会的相互行為過程として捉えることで、諸問題の解決への道筋を明らかにしようとしたものである。

審査員委員会は論文審査と最終試験(公開審査)を行った結果、全員一致して博士(学術)の学位を授与するのにふさわしい研究であるとの結論に達した。

審査委員会は、田島信元(主査)、岩崎 稔助教授、栗田博之教授、根岸雅史教授、宇佐美まゆみ教授の5名の委員で構成された。

【論文の概要および構成】

本論文では、日本における留学生の異文化適応現象に注目し、留学生の異文化適応(文化的学習・精神的発達)を媒介する文化的道具を、言語やソーシャル・ネットワーク(SN)、ソーシャル・スキル(SS)などの活動媒体に絞り、留学生の異文化適応におよぼす社会文化的相互行為の影響過程を吟味することをねらいとして、理論的考察を展開するとともに、データによる実証研究が行われた。

これまで在日留学生の異文化適応研究は、個人が生きる文脈を捨象して取り出した能力を、実験室的な解析方法を用いて、細分化されたいろいろな側面から異文化に良い適応か、悪い適応かのどちらかを決めつける傾向があったが、異文化適応を固定した相手文化の枠組みにあてはめる受動的な過程であるという発想のもとでは、異文化適応の本当の姿はみえてこないと考えられる。そこで本研究では、一方で、従来の研究方法との接点を保つために、留学生の異文化適応に必須な要因として、理論的考察に基づき、ソーシャル・ネットワーク/ソーシャル・スキル獲得を選択し、異文化適応の相関的関連を吟味して両者間の因果関係を同定した。他方、とくに Vygotsky, Bakhtin 理論を中核とした社会文化的アプローチ(Wertsch, 1991)の観点から、ソーシャル・ネットワーク/ソーシャル・スキルを異文化適応行動における文化的道具ととらえ、それらに媒介された社会文化的相互行為過程そのものをマイクロメゾジェネティック(Cole, 1992)の手法を採用して分析することで、社会文化的相互行為過程における個人と環境の相互的変容や、異文化適応過程に見られる新たな文化創造というポジティブな側面を実証的に明らかにしている。

第1章では、留学生の受け入れに関する歴史的概略と研究経緯の概観を踏まえて、留学生の異文化適応問題が注目の的となっていること、ならびにこれまで行われてきた在日留学生の異文化適応研究を時期ごとに明らかにし、留学生が直面する異文化適応問題の特異

性および異文化適応において重視される側面、ソーシャル・ネットワーク（SN）とソーシャル・スキル（SS）という文化的道具（媒体）の存在について論じている。

第2章では、まず、文化人類学、社会学や心理学などの各研究領域における異文化接触・適応研究、およびそれらの研究によって導き出された理論的モデルについて概観し、次いで、対象を留学生に絞り、海外の研究に続く、日本での研究がまとめられている。そして、第1章で吟味されたソーシャル・ネットワーク（SN）とソーシャル・スキル（SS）に関する研究がレビューされ、これまでの異文化適応研究に不足な点や問題点を提起して、最後に、本研究の目的および構成について述べられている。

第3章では、まず、本研究で扱われる「異文化」と「異文化適応」の定義の再概念化の試みが行われ、その結果、「異文化」とは、多声性に基礎をおく対話的機能を引き出すさまざまな形態の「他者性」（Bakhtin, 1979）であること、「異文化適応」とは、相手の文化的枠組みにあてはまるのではなく、声と声の間のダイナミズムという対話的機能（Bakhtin, 1981）によって、社会環境への参入の仕方の変化や新しい意味空間の創造を目指すものであると、定義された。その上で、再定義の基盤となるメタ理論、社会文化的アプローチの異文化適応研究における位置づけについて吟味され、その結果、留学生の異文化適応を捉えるための社会文化的アプローチのもつ視点の特徴、研究遂行上における記述や解釈のための分析単位や、社会文化的相互行為過程における学習の習得的側面と専有的側面の関係などの点を明らかにしている。最後に、社会文化的相互行為としての異文化適応の本質、異文化適応にかかわる社会文化的相互行為過程分析の必須性、社会文化的相互行為としての異文化適応過程における媒介手段の存在という三つの側面から、社会文化的相互行為過程としての留学生の異文化適応をとらえる視点を吟味するとともに、在日留学生の異文化適応における社会文化的アプローチの有効性と必須性を改めて協調している。

第4章では、第2章で吟味されたソーシャル・ネットワーク（SN）やソーシャル・スキル（SS）と留学生の異文化適応との関連が質問紙調査によって横断的に検討を行っている。その結果、留学生のもつソーシャル・ネットワーク（SN）やソーシャル・スキル（SS）に対する個人のデモグラフィック要因の影響は限定的で、それらの獲得は、実際の留学生自身のニーズと環境側の状況との相互行為の産物であること、また、留学生の異文化適応実態も個人のもつ特徴と環境側の働きかけとの相互作用の結果として現れるものであることが示唆された。そして、ソーシャル・ネットワーク（SN）やソーシャル・スキル（SS）と、異文化適応との関連を検討したところ、「ソーシャル・ネットワーク（SN）やソーシャル・スキル（SS）の存在は、在日留学生の異文化適応にポジティブに関わっている」という目的仮説が検証されたが、異文化適応のタイプはソーシャル・ネットワーク（SN）やソーシャル・スキル（SS）の異なった変数によって説明され、影響要因の分化が見出された。言い換えれば、異文化適応は一義に良し悪しと決めつけてはならず、個人側の要因と環境側の要因とのダイナミックな相互作用的關係次第で、今まで不適応ととらえられてきた現象や傾向が適応ととらえなおされる可能性を秘めていることが示唆されたわけである。さら

に、適応とソーシャル・ネットワーク（SN）の関連について客観的な評価を下すために、留学生と日本人学生の比較分析を行っている。その結果、ソーシャル・ネットワーク（SN）が異文化適応に促進的な効果をもつことは、両者において共通にみられた。また、異文化性に起因する留学生の特有な適応問題が存在する一方、日本人学生とは多くの共通点も認められたことから、適応のあり方は個人の属性要因や、文化背景の違いによって特殊性はあるものの、基本的にはそれらの条件の違いを超えた形の、個人と環境との社会的相互行為過程の中に適応の本質があるという適応の基本的なメカニズムの存在を強調している。

第5章では、まず、短期的発生過程における異文化適応の変容について、時間的変化や個人のデモグラフィック要因との関係で縦断的な分析が行われた。その結果、異文化適応は時間的推移に影響されるだけでなく、個人の文化的背景である生育環境、語学力や滞日年数という異文化性にかかわる要因によって、差が生じるとの示唆が得られている。また、時間的要因と個人の属性要因を組み合わせる上で、異文化適応との関連について分析を行わない、調査時期と出身地域別、調査時期と日本語能力別や調査時期と滞在期間別によって、異なる領域の適応パターンが異なることを明らかにした。つまり、個人側の要因と周囲環境側の要因とのダイナミックな相互行為のあり方によって、適応のあり方が変わってくることに、また、異文化適応は時間的変化を伴う過程であるがゆえに、個人の異文化適応を一時点や一側面から判断するのではなく、発生的にとらえるべきであることが示唆された。次に、質問紙調査で見出された客観的な適応評定結果は留学生の自身の適応に対する意識と一致するかどうかについて検討がなされた。面接調査の結果は、両者の間に大きなギャップがあること、すなわち、質問紙調査の結果の如何にかかわらず、留学生自身の適応観がよりポジティブにとらえられていることが明らかとなり、また常に相手の枠組みに一方的にはめ込むのではなく、個人の持つ生得的な要因に加えて、行動の内容や、その時々状況までも考慮し使い分けるのがベストとすることが明らかとなった。さらに、質問紙調査による量的結果と面接調査による質的結果の相違点は何を示唆しているのかについて吟味を行った。その結果、認知が実体と不一致であることは、適応（学習・発達）の本質を支える重要な道具であることが示唆された。そこで、留学生の異文化適応にかかわる具体的な経験が生起する社会文化的相互行為過程そのもののあり方を分析する必要があること、さらに、異文化適応研究は単一の方法に頼るのは不十分であり、必ず複数の研究アプローチで方法間の差異や矛盾を検討すべきであることが強調された。

第6章では、量的データと質的データの違いから得られた示唆から、留学生が実際に活動するさまざまな社会的文脈の中で異文化適応の社会文化的性質について検討がなされた。ここでは、複数の社会的場面における文化的道具、とりわけ、フォーマル言語（敬体表現中心の改まったことば遣い）とインフォーマル言語（常体表現中心の友達ことば的なことば遣い）を場面に応じて使い分けるといった、「ことばの使い分け（スタイル・スイッチング）」という基礎的な媒介手段が他者との社会的相互行為の達成に寄与することが示唆された。そして、「ことばの使い分け」という文化的道具を媒介とした行動は、家庭、学校、近

隣，職場という複数のメゾシステム・レベル（Bronfenbrenner，1977）における領域横断的な文化的道具，すなわち，他者との共通認識形成のための話し合い，場面に応じたことば遣いの取り込みという腹話現象，コミュニケーション行為におけるあいさつなどを獲得し，自己行動のナビゲーターとして自己行動を制御することが示唆された。さらに，他者との社会的相互行為過程の中で，文化的道具を自己活動の指針として取り込むという習得的学習と，文化的道具を徐々に活動場面に応じて巧みに使い分けていくという専有的学習を行うことで，自己制御的に環境に適応を果たすことを目指すこと，また，認知的不一致や葛藤などゆえに，習得的学習と専有的学習は常にお互いを喚起し，共時的・表裏一体的な存在であることが示唆された。そして，そのような相互行為の中で自分と相手が共に変化していることが示唆され，両者の新たな意味を創造するという適応の積極的な側面が浮き彫りにされている。

第7章では，本研究に関する全体的な考察を行った上で，留学生の異文化適応にかかわる社会文化的相互行為のプロセス・モデルの作成を試みている。そして，本研究において見出された知見と提案されたプロセス・モデルに基づき，社会文化的相互行為過程としての異文化適応の本質について吟味が行われ，その結果，異文化適応は文化学習・精神発達の過程であること，異文化適応には常に習得的学習と専有的学習の両側面が共時的・表裏一体的に存在すること，学習・発達過程にかかわる個人と他者がともに変化していること，学習・発達過程には認知不一致などの葛藤や軋轢が存在するがゆえに行为主体が常に新たな共通な意味を生成する，といった異文化適応の特性と所産が示唆された。

【論文の評価】

まず，本研究における意義について，本人の主張を含め，以下のような吟味が行われた。

本研究の第1の意義は，在日留学生の異文化適応に対するこれまでのメタ理論的枠組みや異文化適応概念の再検討を迫るものであるということである。異文化適応は，相手の文化的枠組みにあてはまるのではなく，個人と環境との対等な社会文化的相互行為に基づく新たな意味の創造過程であることを示唆した本研究では，留学生の適応の個人差はこれまでの研究理論が仮定するような，異文化性や個人の属性要因によるものと過大視するのではなく，文化的道具に媒介された社会文化的相互行為のあり方に影響されることが示唆されたのである。つまり，これまでの異文化適応研究の理論的枠組みでは，個人にのみ焦点をあてることが多く，具体的な社会文化的要因がそれほど重視されない傾向や一時点で適応をとらえる傾向があるのに対して，本研究において用いたメタ理論である「社会文化的アプローチ」では，留学生の異文化適応本質への理解は発生的過程の中で文化的道具に媒介された個人要因と社会文化的要因との相互行為過程をとらえることなしでは不可能であることが強調されている。近年，適応をとらえる場合，個人のもつ生物学的要因と，個人が活動する社会文化的な環境（文脈）要因との統合的な相互行為過程として扱う必要性が叫ばれる中，こうした観点をもつ実証的研究はほとんどみられないのである。今後の留学生

の異文化適応研究に一つ方向性を示すという意味では、異文化適応のメカニズムの解明に「社会文化的アプローチ」を用いたことは大きな意義があると考えられる。

第 2 の意義は、留学生の異文化適応に影響を与える要因を客観的な要因だけにとどめなかったことといえよう。本研究では、異文化適応の変化過程に焦点をあてた基礎研究としての意味をもたせるために、時間的変化や個人の属性のような数値で測定できる要因のみを問題としたが、このように独立変数を客観的な要因のみに扱うことは、問題を見えにくくするおそれがある(塘, 1999)ことから、後半においては、留学生のもつ主観的な指標、すなわち個人がそれぞれの適応をどのように認知しているかといった主観的な適応観を説明要因に用いている。客観的な指標よりも、調査対象者がもつ主観的な指標の方が、この場合においてはより重要と考えられるからである。異文化適応研究では今まで客観的な指標を主として独立変数として扱い、調査や観察が行われてきたが、個人の主観的認知への考慮もますます必要になってくるという意味では、この試みは意義のあるものと思われる。

第 3 の意義としては、実際の生活場面の中で、具体的にどのような社会的相互行為がどのように行われているかという、さまざまな社会文脈のもとでの相互行為のあり方について吟味したことである。留学生は活動場面での課題に対して、周囲の人々とのやりとりの中から、彼らがもともともっている言語・記号などの基礎的な文化的道具を介して、自己の行動の指針となるような共有的な知識(情報)を取り込む(習得的学習)ことで多様な社会的活動を自己制御的に行えるようにし、それらを自分なりの使用を通じて改変し、自己活動のための新しい文化的道具に仕上げていくこと(専有的学習)、すなわち言語・記号を媒介とした、そしてそれらの媒体を創造していく形での特定社会集団や活動場面への適応・変革のプロセスが示唆された。これらの結果は、Bakhtin(1981)の「対話性原理」を支持するとともに、基礎的な文化的道具を媒介に獲得した手かがりを応用・改変することで新たな文化的道具を自ら、共同で創り出していくという創造的側面が強調されたことは大きな意義をもつものと考えられる。

第 4 の意義は、方法論に関するものである。本研究では、横断的研究や縦断的研究において、法則定立的な観点から文化的道具と異文化適応との各要因間の相関的関連の抽出を目的とする推測統計的分析法と、微視発生的研究において、ケース研究的な観点から社会文化的相互行為のプロセスそのものを描写・解釈するマイクロジェネティック分析法の両方法論をともに採用し、それぞれの特徴を生かした研究を行った。そして、両方の方法論で異文化適応の相互作用的なダイナミズムが実証できたことから、結果の連続性が示されるとともに、社会文化的アプローチは心理学の伝統的なアプローチの延長線上にあることが示唆されたことは大きな知見であろう。

以上のような本研究の意義は評価に値するものだという認識のもと、審査委員からは研究遂行上の観点から、いくつかの改善すべき点があげられた。第一に、相互行為過程そのものを分析するという意欲的な研究であることは評価できるが、ケース研究における調査

対象者の特性に関する記述が明確ではなく、一般論に導くためには不十分と考えられること、また、縦断研究を7ヶ月間行っているが、異文化適応という観点では短すぎるのではないかということから、相互行為過程の妥当性についての吟味が欠けているのではないかと指摘があった。第二には、文化を固定的に捉えてはいけない、という観点でプロセス・モデルの提起を行っていることなどは評価できるが、その意味では、留学生と日本人学生の比較（対照）研究はややパターン化しているところがあるのではないかと指摘があった。第三には、適応を同化と捉える権力的な見方を否定して、「関係性の中で文化がいかに関構築されていくか」ということ明らかにするために本研究が遂行されている点は評価できるが、調査データがそれと一貫したものといえるかどうかは疑問であるという指摘があった。

試問における以上のような指摘に対し、本人からの説明・弁明を受けたあと、最終的には、以上のような難点が見て取られることは事実だが、文化というものを固定的に捉えないうための方法論の困難性、相互行為過程というプロセスそのものをデータとして捉えることの難しさなど、大きな問題を、しかし、短い時間でよく捉えた労作であることは間違いないという総合的評価が下り、論文形式（研究展開形式）も的を射たものであり、課程博士論文としては十分な力量を備えていると判断できるとして、全員一致して博士（学術）の学位を授与するのにふさわしい研究であるとの結論に達した。